

〔研究ノート〕

授業理解度調査を用いたマクロ経済学の授業改善について

阿 部 太 郎

名古屋学院大学経済学部

概 要

本稿は、授業理解度調査を用いて、マクロ経済学の授業改善策を検討している。主な結論として、以下のことが明らかになった。

1. 数式を用いた回の理解度が極端に低い。逆に、数式を用いず言葉だけの説明をした回の理解度が高い。
2. 演習問題を用いた回の理解度が高い。その際、図を用いるとより効果的である。

キーワード：授業理解度調査，マクロ経済学

On improvement of Macroeconomics class by a questionnaire on understanding level of classes

Taro ABE

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2017年10月31日

はじめに

十数年来マクロ経済学を担当して感じるのは、ごく簡単なものであっても数式を出したとたんに、拒否反応を示し学習意欲が萎えてしまう学生がいかに多いかということである。これに対して、毎年何らかの方策をとってきたのではあるが、実際にその方策がどのくらい効果があがっているのかを十分に検証してきたとは言い難い。最近、大学のポータルサイトに授業ごとに理解度調査を行うことができる機能が付け加わったので、これを用いて授業改善策を検討してみることにした。その際、授業理解度調査に加え、授業終了後に毎回授業の感想や質問を書いてもらい、より詳しく授業理解度の実態を把握するよう努めた。

現在名古屋学院大学経済学部には、「マクロ経済学入門」「マクロ経済学1」「マクロ経済学2」という3つのマクロ経済学関連科目があり、それぞれ、基本的な統計指標の理解、IS-LM分析の習得、AD-AS分析と成長理論の習得が大きな目標となっている。ここでは、「マクロ経済学入門」よりも数式を用いる機会が多く、数式への拒否反応を最初に示す学生が多いと考えられるため、「マクロ経済学1」を取り上げることにする。

以下、1節で授業内容について述べ、2節で授業理解度調査を用いた考察を行う。最後に、これらの内容を踏まえてまとめを行う。

1. 授業内容

2016年度春学期のマクロ経済学1の授業内容は、表1の通りである。

「マクロ経済学1」の最終目標はIS-LM分析の習得であり、その目標に向かって各回の授業が構成されている。表1の授業構成は概ね標準的なものであると思われるが、IS-LM分析と関連が深いマンデル・フレミングモデルは「マクロ経済学2」に回している。当初はマンデル・フレミングモデルも「マクロ経済学1」で教えていたが、時間的に余裕をもって教えることができるようにIS-LM分析の習得にしばった授業構成にしている。マクロ経済学のような理論系の科目は、数式がいくらか出てくることから学生にはあまり好まれない科目のようである。授業内容を補い自習を進めてもらうために、教科書¹⁾を指定したり、毎回のレジュメに教科書の該当頁を記入したり、授業のポータルサイトに自学自習用の問題を公開するなどの工夫を行っている。

2. 授業理解度調査の結果とその考察

図1の授業理解度調査の横軸は授業回数、縦軸は人数を表わしている。

まず図1を見てわかることは、数式を用いた回である4、5、7、9、10、12回の理解度がすべて低いことである。これらの回の感想を見ると、「記号の多い数式がよくわからず混乱した。」「計算式が難しく感じました。」といった感想が並び、数式理解の困難さが示されている。

それに対して、数式を用いず、経済的な説明や図を中心とした回である1、2、3、8、11、15

表1 授業内容

回	内 容	詳 細
1	はじめに	注意事項・IS-LMが誕生した背景
2	国民所得統計	ストックとフロー，GDP
3	国民所得統計（2）	三面等価の原則，名目と実質
4	国民所得統計（3），財市場の分析	GDP統計の長所と短所，消費関数，GDPの決定
5	財市場の分析（2）	乗数，政府の導入
6	財市場の分析（3）	GDPの決定に関する問題演習（基本）
7	財市場の分析（4）	GDPの決定に関する問題演習（税関数，開放経済）
8	金融市場の分析	貨幣，信用創造
9	金融市場の分析（2）	日銀，マネタリーベース，マネーストック
10	金融市場の分析（3）	貨幣需要（投機的動機を中心に）
11	金融市場の分析（4）	利率の決定
12	IS-LM分析	モデルの説明
13	IS-LM分析（2）	財政政策＋問題演習
14	IS-LM分析（3）	金融政策＋問題演習
15	IS-LM分析（4）	流動性の罣など

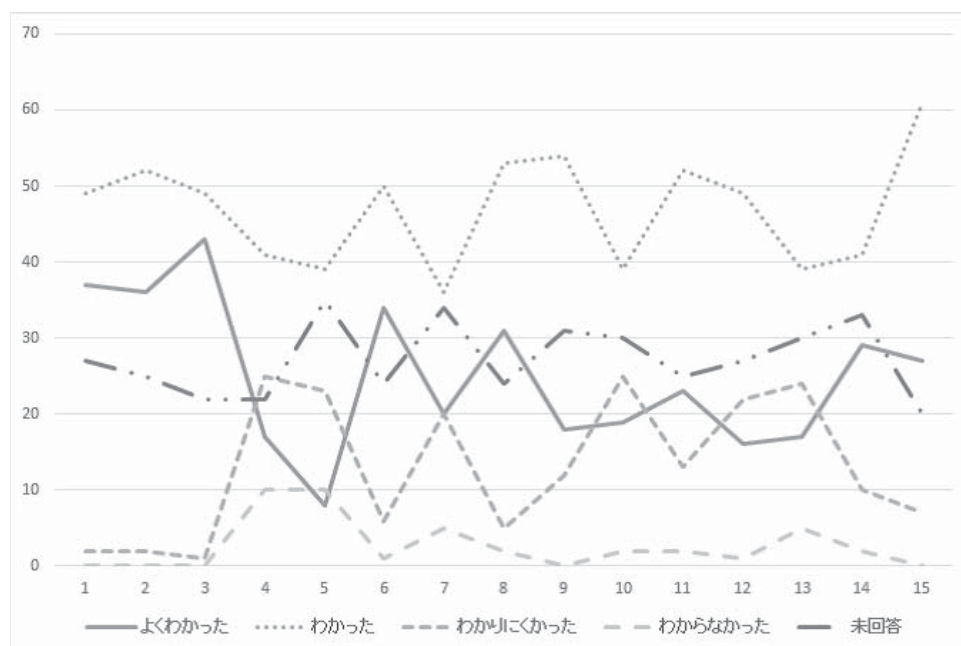


図1 授業理解度調査の結果

回の理解度は概ね良好であった。

また、演習問題を中心としたのは、6, 7, 13, 14回であったが、13回目を除けば、理解度は概ね良好である。これらの回の感想では、「先週の段階では理解できなかったのですがやっと理解出来ました。」「今日は計算が自分でできるようになった。」「今回みたく練習問題をやって頂けると今後も助かります。」といった肯定的な意見が多数寄せられている。しかし、6回目より7回目、14回目より13回目の理解度が低いことが示しているように、演習問題の用い方に注意が必要であると考えられる。7回目の問題演習は、6回目の応用という位置づけであり、6回目以上に丁寧な解説が求められた。6回目の理解を当然のように進めたことに問題があったと考えられる。14回目の理解度が13回目よりも高かったのは、13回目は計算だけであったが、14回目は図示させる設問を用いたことによると考えられる。問題演習においても、計算だけではなく、図で計算結果を確認し、理解度を向上させることが必要である。

まとめ

以上、授業理解度調査を用いてマクロ経済学の授業改善の方策を考察してきたが、明らかになったのは、次の二点である。

1. 数式を用いた回の理解度が極端に低い。逆に、数式を用いず言葉だけの説明をした回の理解度が高い。
2. 演習問題を用いた回の理解度が高い。その際、図を用いるとより効果的である。

以上のことから、言葉と図による説明を中心にし、数式は補完的なものにするか、数式の説明の後に時間を十分とり演習問題を導入することによって理解度を向上させることができると考えられる。今後、これらの点に留意しながら授業を改善し、その結果を再度検討する予定である。

なお、ここで述べた以外の課題としては、現実には起こっている問題と授業との関連をうまく提示していくことが挙げられるが、時間の制約もあり十分にそれができているとは言い難い。これも残された課題である。

参考文献

- [1] 中谷武他 (2009)『新版 マクロ経済学』, 勁草書房